



至上の印象派展ビュルレ・コレクシオン(スイス)が東京の乃木坂にある国立新美術館で開催されている。今回の絵画展で最も注目すべき作品はもちろん、印象派の巨匠ピエール・オーギュスト・ルノワールがまだ駆け出しのころに描いた《絵画史上、最強の美少女》である《イレエヌ・カーン・ダンヴェール嬢》であるが、今回の絵画展を逃すと、日本で観ることが二度とできないとのマル秘情報を得て、東京まで足を運んだ。

誰でも一度は観たことがある世界で最も有名な肖像画のひとつでありながら、モデルの少女のことはほとんど知られていない。

《絵画史上、最強の美少女》

イレエヌ嬢の数奇な運命と

ワインミステリー

情報広報部 橋本 洋一

この肖像画の美少女はルノワールのスポンサーである裕福なユダヤ人銀行家カーン・ダンヴェール伯爵の長女で、当時8歳のイレエヌが伯爵の邸宅の庭で2回のポーズを取って描かれた作品と言われているが、8歳の女の子とは思えない落ち着いた、愛らしい瞳は何を見つめているのだろうかといった素朴な疑問が湧いてくる。

「肩を覆う栗色の髪、青いドレス、背景の

濃い緑の茂みが流れるように描かれ、少女の透き通るような白い肌、あどけない表情が愛らしい。ドレスが手早く仕上げられる一方で、栗色の髪の毛と黒いまつげが一筆一筆丁寧に念入りに描かれ、髪の毛やまつげの描写への強いこだわりが感じられる」との丁寧な解説が耳の奥で流れる。この作品を含めた多くの作品での細やかな筆遣いからは、ルノワールがリウマチを患っていたとは思えない。ルノワールは『私が描く風景は散歩したい風景であり、私が描く女性を抱きしめたい女性である』と述べているが、イレエヌの妹達を含めた愛らしい少女達の作品も決して少なくはない。

イレエヌ自身のこの作品の評価は私の抱いていた想像とはまったく異なっており「あの絵は大嫌い。髪の毛をとかすためにひどく引張るし、まったく動いてはいけないうえ、拷問よ」となるわがままな深窓のお嬢さんと解釈されかねない言葉を残している。

この絵が歴史の舞台上に登場したのは1942年でイレエヌの長女が所有していたのだが、ナチスの略奪に遭い、ヒトラーの側近のヘルマン・ゲーリングの所有になっていたらしい。ヒトラーは画家志望ではあったが、古典的作品を好み、印象派の作品を退廃芸術と決めつけて迫害したためにナンバー2のゲーリングが入手したと考えられている。サロンに出品された時から66年の時を経た1945年にイ

レエヌの手に戻ることになる。イレエヌは19歳の時に銀行家と結婚し、長男と長女に恵まれる。社会の中で活発に行動し、労働者の子どもたちのための福祉施設を開設したり、第一次世界大戦では看護師として最前線に赴いたりしたという。しかし、夫と長女そして再婚後に生まれた次女はドイツ軍に捕らえられ、ホロコーストの犠牲になる。幸いにもイレエヌ自身は離婚を契機にユダヤ教からカソリックに改宗し難を逃れた。この愛らしい肖像画を観て、この美少女が将来、ナチスの魔の手に追われ、身内がホロコーストの犠牲となる人生を送ることになるうとは、誰も予期できなかっただろう。

1958年、孫娘の結婚パーティーの席で、ミステリーの女王アガサ・クリステイが世に送り出したエルキュール・ポアロと同格の名探偵ミス・マープルのような上品な顔立ちの老婦人イレエヌが白ワインを手にしている写真が残っている。はたして、この白ワインは、フランスの白ワインの最高峰 絹のワイン『モンラッシェ』か、重層感を呈するコート・ド・ボーヌの『ムルソー』かいやはたまたまたまた見つけた良質で美味の『Vinde Pays (地酒)』か？

描かれた時から84年の歳月が流れた1963年、イレエヌはパリの自宅で静かに息を引き取った。《世界中で最も知られた、青い服の少女 逝く》との大見出しが新聞紙上を飾った。イレエヌの波瀾万丈の人生は静かに閉じたが、ワインミステリーの解明はまだまだ続く。